

第五課 神の心に応えて(2)

「隣人とは誰か」

善いサマリア人 ルカ10:25～37

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができますでしょうか。」

イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力をつくし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい。』とあります。」

イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

イエスはお答えになった。『ある人がエルサレムからエリコへ下っていく途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。

ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。

同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。

ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、

近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡していった。『この人を介抱してください。費用がもっと掛かったら、帰りがけに払います。』

さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。』

律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

【解説】

イエスの時代、律法学者やファリサイ派の人たちは、イエスを試しその言葉尻をとらえて批判しようと機会を狙っていました。ルカ10章は、彼らが自分たちの好んだ議論のテーマ「永遠の命」についてイエスに問

いかける場面です。注目すべき点はこの質問です。永遠の命とは神の命であり、どうしたら神に褒められるのか、人生の目的は何か、人間は何のために生きているのかという基本的な質問でした。

「先生、何をしたら永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか」イエスは、彼らの意図を見抜いておられましたから、答える代わりに逆に質問されました。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と。正統派のユダヤ人は両方の手首に聖書の重要箇所を書いた「フィラクチリ」という小箱をつけていましたから、あなたの小箱の中の聖書にはどう書かれているかと問い返されたのです。

彼らは答えました。

*「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」

第一の石板に刻まれた神についての第一から第三の掟を一言でまとめたもので、全律法精神を要約するものです。神以外のもの、偶像、自分の持ち物、仕事、趣味、名誉心などを神としてはならない。神のように大切にすることは十戒に反するものであると、戒めています。

*「隣人を自分のように愛しなさい。」

十戒の第四～第十までの隣人についての掟を一言でまとめたもので、人間同士の関わりかたに関する倫理の領域です。人間は誰でも自分のことは大切にし、自分のことを中心に考えてしまいがちですが、自分と同じように人を大切にしなさいと言うことです。

神と人への愛が人間の最も大切な行為であるという彼らの答えの正しさを認め、実行するようにと勧めます。大切なことは知識ではない。その背後にある神の思いを実行することだからです。ユダヤ人毎日唱える信仰宣言(申命記6:5)

*「私の隣人とは誰ですか？」

律法の専門家たちは、律法に書かれた事を具体的な生活の中でどのように実践することがふさわしいのかと、更に問います。

イエスは律法学者に対してどのような心境で語られ接したのでしょうか？ご自分を試そうとして質問しているにも拘らず、主の応答は、彼らが本当に自分の間違いに気づくよう、律法を使って真の答えを導き出そうとしておられます。

「善きサマリア人」のたとえ話を使って「誰がその人の隣人となったか」と問いかけ、「神を愛し隣人を同じように愛すること」を知っているあなたがたは、その愛が絵に描いた餅にならないよう「行って同じようにしなさい」。悪意で近づいた人に対しても主は出会いを大切にされたのです。

Ⅱ「善いサマリア人」のたとえ話

たいへん分かりやすい話で、情景を想像の眼で思い浮かべながら読んでみましょう。

<場所>

エルサレムからエリコに向かう20数キロの山道をだんだん谷に下って行き、途中で海拔0の地点を通り、やがて草木もない砂漠地帯に入ります。その中のオアシスがエリコという商業都市です。

<登場人物>

* 追いはぎにあって苦しんでいる人(どこの誰であるか、わかりません。)

* 3人が通りかかる。

「レビ人」と「祭司」

エルサレムの神殿で神を礼拝するための仕事をする人、聖書に精通している宗教者が、追いはぎに襲われて道ばたに倒れている人を見ると、道の反対側を去って行きました。関わりたくないということでしょうか。宗教家であり神の教えを良く知っているはずの人たちが、見て見ぬ振りをして通り過ぎたというのです。自分を優先するが故に、隣人となるべき人を見捨てたこととなります。彼らにとって、愛すべき隣人とは誰のことかと問うことは、誰であれば見捨てても仕方がないと思えるのかということでもあるでしょう。

注 祭司：神と人との仲介者、すなわち人々のために人々に代わって神に礼拝と供え物をささげ、祭儀をつかさどる人。旧約ではレビ族のアロンの子孫に限定された。

*レビ人：12族長の一人レビの子孫で、イスラエルにおける祭司階級。祭司の下位にあって宗教的公務を果たす階級。神殿での奉仕に加えて民の教育にも当たった。レビ人には嗣業の土地は与えられず48の町に分散して住み、他の部族の人から農産物と家畜の十分の一を受けて生活していた。

*「サマリア人」

サマリア人にはユダヤ人から異邦人と呼ばれるようになった歴史があります。ソロモン王の没後、南ユダ国と北イスラエル王国に分裂しました。紀元前722年に北イスラエル王国はアッシリア帝国に滅ぼされ、僅かに残ったサマリア人はアッシリア人の血が混じった汚らわしいユダヤ人として南ユダ国のユダヤ人から軽蔑されながら、ゲリジム山に神殿を構えたのです。そうしてユダヤ人とサマリア人は親戚の関係であつても、忌み嫌う関係がイエスの時代まで続きました。

A. 隣人とはだれか？

追いはぎに襲われて道ばたに倒れている人はおそらくユダヤ人だったでしょう。

その倒れている人を、敵であるはずのこのサマリア人は、信じられないほどの愛の心をもって手当をしました。「隣れに思い」という表現は、「スプラクニゾマイ」というギリシャ語が用いられています。「はらわたが揺さぶられるほど深く共感する」ことを意味します。彼は、傷の手当てをしただけでなく、自分のロバに乗せて宿屋に連れて行き、さらに介抱します。一泊した翌日、宿屋の主人にお金を渡して手当を頼んで旅立ちます。このサマリア人と追いはぎに襲われた人は、全くの赤の他人であるにもかかわらず、まるで自分の家族のような厚い介抱をしました。自分を愛するようにけが人を愛し、大切に扱う、非常に親切で奇特な人でした。献身的に助けるこの方はいったい誰の姿を現しているのでしょうか？

視点の転換

「私の隣人とは誰ですか？」という問いに対して、イエスは「誰がその人の隣人となったか？」と問い返されます。この違いはどこにあるのでしょうか？

自分が愛を向ける対象が隣人として「ある」のではなく、助けを必要としている人に出会ったとき自分が隣人に「なる」ように招かれているということです。

ローマによる圧政の下、当時民族主義的傾向が強くなっていたユダヤ人社会においては、隣人はユダヤ人、ユダヤ教徒、同郷人、家族、親戚、近所の人、に限られていました。

B. 真の善いサマリア人とは

- 私は、このたとえ話の登場人物のうちの誰に当たるでしょうか？
- 自分はこの追いはぎに襲われて半殺しにされ道ばたに倒れていた人ではなかったでしょうか？

- 生きておられるイエスが、善きサマリア人として近づいて下さったのではなかったでしょうか？

□ あなたが同じ場面に遭遇したらどうしますか。

困りあぐねて、そばに立っておろおろするのか、積極的に近寄り、介抱し、ロバにのせて宿屋に行き、さらにお金がかかったら帰りに払うという、犠牲的精神をもって対応できるでしょうか？

この物語は、追いはぎに襲われて半死半生の状態になっている人に対して、私たちはどう接するのか問いかけてきます。我が身に置き換えて考えてみましょう。関われば時間も取られるし、面倒なことになると、躊躇するかもしれません。しかし、私たちにも、イエスの示された敵をも愛する愛に生きることが求められています。主イエスの示される命の道に歩む者となれるよう、願って祈りましょう。

今の日本には、外見は収入もあって何不自由なく生きているように見える人が多いようですが、実は心の中はズタズタになっており、生きていく希望も気力も失ってしまっているという人が多いのかもしれない。物理的に追いはぎに襲われて倒れてはいないけれども、心がボロボロの状態で立ち上がることができない、そういう人に対して、私たちは何が出来るのでしょうか？

善きサマリア人の話がたとえ話であるとすれば、この人はキリストの姿でしょう。私たちもこの命を受けて、隣人のために奉仕するとき、このキリストの愛の精神が基礎になる必要があります。

マザーテレサは言っておられます。「困窮している隣人への奉仕はとても善いこと。しかし、礼拝(祈り)を抜きにして慈善行為は成り立たないのです。神のお言葉から離れての行為、イエスと結びつかない奉仕は、自己満足に陥ることさえあります。奉仕の原動力である神の言葉に聴く必要があるのです。

律法の専門家は「何をしたら」永遠の命を受け継ぐことができるかと、質問しました。しかし、永遠の命は、私たちが何かをしたらいただけというものではありません。それはただ、イエスさまから憐れみによって与えていただくものです。傷つき、倒れた人々のところに近づく善きサマリア人はイエスさまのお姿です。私たち自身がイエス様に癒していただき、立ち上がらせていただく時、イエスさまのお手伝いをさせていただき善きサマリア人になれるのです。